

韓国におけるキリスト教会受容をめぐる

韓国におけるキリスト教受容をめぐる

——異宗教交流の観点から——

梶村 昇

一 問題の所在

世界の宗教史は、一面、異宗教の交流史であるといってもよい。原始宗教の世界に、突如とし高度な宗教が入りこんでくる。あるいは、民族宗教と世界宗教との交流が行われる。あるいはまた、世界宗教間での接触が、長く、執拗に繰り返される。こうした面だけを追っていくと、それがおのずから世界宗教史となっていくものである。

以前、このことに興味をもち、異宗教の交流の歴史を辿っているうちに、その交流には、法則とまでは言わないまでも、ある一定の傾向があるのではないか、ということに気がつき、これをまとめたことがあった。(拙著『アジアの宗教』・南窓社・昭四七刊)。それは試論であり、必ずしも固まったものではなかったけれども、そうした傾向があることは、示しえたと思っている。そこでまず、その中から、この小論に関係があると思われるものを、一部分だけ摘記し、それとの関連で、本稿のテーマにどのような問題が生じてくるかをみてみたい。紙数の関係

で、厳密な作業プロセスを省略するので、要旨だけを汲みとつて戴きたい。

第一に、たとえば、これは当たり前のことかも知れないが、原始宗教の中で生活している状態に、高度な宗教が入りこんでくると、ほとんど例外なく、高度な宗教が迅速、かつ容易に伝播されていくものである。これは、文化は高いところから、低いところへ流れていくものであるから、文化の一部である宗教も、当然そうなるわけであるが、異宗教の交流史の第一歩は、ほとんどがこのケースであるので、改めて述べたまでである。しかも、この場合、相手の文化が低ければ低いほど、その影響は顕著であることもはっきりしている。

第二に、それだからといって、原始社会の人々、種族、あるいは、民族と言つてもよいが、彼らが育て保つてきた固有の宗教、あるいは、宗教的思惟は、あるいはまた、生活感情と行為という程度のものであるかもしれないが、それらは、異宗教との接触によつても消滅することなく、民族の底流に長く生き残つていくものであるということである。私はこれを「民族の三つ子の魂、百までも」と表現してみた。（拙著『日本人の信仰』・中公新書・昭六三刊）。

第三に、ところが、高度な宗教が、比較的文明度の高い民族に受容された場合には、その民族のもつ自然宗教は、それに同化しつつ反発し、その民族固有の宗教を形成していく。たとえば、中国に仏教が入り、中国固有の宗教である道教が形成されたこと、日本の神道、チベットのボン教などもその類型と言える。

第四に、この小稿に特に関連のあることは、高度な宗教間の接触の場合である。たとえば、仏教社会の中に、キリスト教が入り込むというようなケースである。これは今まで調べてきた傾向からすれば、「高度な宗教間の接触においては、すでに一つの宗教が、民族の中に確立され、その宗教を中心とした文化統合が行われている所

では、他の一方の宗教は容易に布教されることはない」という例が圧倒的に多かった。二、三の例をアジア各地で拾ってみれば、

ヒンズー教を基盤としていたインドに、イギリスは、その長い統治の間、キリスト教の布教を計ったが、独立してみると、ヒンズー教徒、八二%であつて、キリスト教徒は二・六%に過ぎなかった。

仏教を基盤としたビルマも同様であつて、六十数年にわたるイギリスの統治とキリスト教の布教にもかかわらず、今日、仏教徒は九〇%、キリスト教徒二%である。しかも、その二%のうちの六七%は、山岳民族であるカレン族、カチン族等の、それまで原始宗教を信奉していたとおぼしき人々が、キリスト教化したものであつて（この伝播は、先に述べた第一の傾向にあてはまる）、主体民族であるビルマ族は、九八%までが仏教徒であつて、キリスト教は容易に入り込むことができなかった。ベトナム、ラオス、カンボジャについても同様のことが言える。

これは何もキリスト教と仏教との関係だけに言えることではない。たとえば、フィリピンについては、フィリピンは、マゼランの発見以来、圧倒的なローマ・カトリックの布教地であつた。（これも第一に示した傾向による）。後にアメリカが、プロテスタントを持ち込んできたが、ついにローマ・カトリックの牙城を揺るがすことはなかった。今日、カトリックの信徒数は八三%を数える。こうした例を挙げようとするれば、まだまだ挙げることができるが、この小稿にとくに関連あるものとして、日本の例を見てみよう。

日本は、この第四の例の中で、最も顕著なものの一つである。日本におけるキリスト教布教の歴史は、クリシタン時代は別として、明治六年（一八七三）、キリスト教禁制の高札が撤廃されてから始まり、以後、困難な状況

下にあったとはいえ、すでに百年の歳月を越えている。とくに第二次大戦以後の宣教活動は目覚ましく、私など当時、この嵐のようなキリスト教攻勢を見て、「日本はキリスト教国家になつてしまふのではないか」と思ったほどであった。ところが、それから四十年たった今日、キリスト教側の発表でも、信徒数一六万（一九八四年末現在）であつて、日本の総人口の１％に満たないほどである。熱心な信者に言わせると、「これはシンパ的信者である周辺の者を含めた数であつて、実数は七十万人ほどではないか」と言っているほどである。この遅々たる歩みはなぜであろうか、世界のキリスト教界にとつても、重大な問題となり、しばしば討議が行われているとさえ聞いている。それに対する直接的な答えにはならないが、これは何も日本だけの特殊な例ではなく、異宗教交流のひとつの傾向としてみるべきであるということである。ここで言えば、第四の傾向、すなわち、「仏教、神道」というような高度な宗教が、すでに民衆の中に確立され、その宗教を中心とした文化統合が行われているので、たとえキリスト教というような高度な宗教が入ってきたとしても、容易に布教されることはない」ということのもつともはつきりした例であるといえる。

さて、この日本の状況に比較して、韓国におけるキリスト教のそれはどうであろうか。それは、一口に言えば、日本とまったく逆であつて、比較にならないほどの盛況さを示している。まずこれを統計によって見てみると、末尾第一表のようになる。

この表で分かるように、改新教（プロテスタント）一〇三三万人、天主教（カトリック）二三一万人であつて、その合計一六四万人は、仏教の一四八二万人に匹敵するほどである。しかも、この仏キ両教の比率は、日を重ねるに従つて逆転しそうである。

余計なことであるが、この表はおもしろいことに、信者合計数が四三・四二万となっている。これは韓国総人口を百万人ほど上回っている。宗教統計などというものは、大体がこのようなもので、あまり厳密に考えない方がよいと思う。これなどはまだよい方で、もっと傑作なのは、日本の文化庁文化部がまとめた日本人の宗教統計である。それによると、日本の総人口は一億二千万人であるにもかかわらず、宗教信者の人口は二億二千万人となっている。不思議な統計ではあるが、これは各宗教法人の報告をそのまま単純合計した結果によるものである。

韓国のこの表の誤差の主な原因は、後で述べることになろうが、ここに示されている儒教の信者数によるものと思われる。大体韓国内で儒教の信徒など、そうはつきり分かったものではない。儒教そのものが、信徒の数を数えるような性質のものとなっていないからである。たとえば『韓国宗教便覧』によると、儒教の信徒は、七八万六千人となっている。これは一九八三年十二月三十一日現在のことであるが、いかに四年後の統計とはいえ、それが急に一千万人をこえることはありえないのである。であるから、この表は、日本と同様、各宗教法人の報告をそのまま単純合計したものであろう。

一九八四年二月、韓国ギャロップ調査研究所は、「韓国人の宗教と宗教意識」を発表した。それによると、宗教人口は、総人口に対して四三・八%、非宗教人口五五・八%、無回答〇・四%であり、このうち宗教人口の内訳は、仏教一八・八%、改新教一七・二%、天主教五・七%、その他二・一%である。ここでは改新教と天主教の合計は二二・九%で、仏教の一八・八%をはるかに越えている。（総人口は四〇、四四八、四八六名・八五年一〇月一日現在）。

ともかくキリスト教は、日を追って盛んになっているのである。その様子は末尾の第二表を見ていただくと分

かる。これはキリスト教徒の年度別推移表であるが、これによると、一九八一年に、すでに改新教徒は、七六三万人、天主教徒は、一四四万人であつて、総人口比二三・五%となっている。統計によつてこゝも異なるということの一例であるが、他の統計を見ても、キリスト教徒の数は、多くこそなれ、少なく記しているものは殆ど見当たらないほどであつて、その盛況ぶりが分かる。しかも、その盛況ぶりは、統計よりも、実際の印象の方がはるかに強烈である。

たとえば、ソウルのような都会はもちろん、農村でも、山奥でも、教会の见えない光景を探すのがむずかしいことは、韓国を旅行された方は、みんな経験していることであらう。デパートでは、キリスト教の聖画の置物、十字架の飾りものがずらりと並び、書店には、キリスト教関係の書籍が、仏教書の十倍ほど書棚を埋めている。一九八五年、韓国キリスト教百周年記念集会に、百万人が参加した様子など、驚異としか言いようがないほどである。

さてここで、問題の所在を考えてみたい。

まず第一に、誰が考えても疑問に思うことは、この驚異的なキリスト教の盛況さは、なぜか、ということである。

第二には、この小論は、冒頭から、異宗教の交流という点から考えてきたが、韓国のキリスト教受容は、日本の場合と同様に、常識で考えてみても、先の第四のケースに当てはまる。しかし、現在の韓国におけるキリスト教の盛況さと思うと、とてもこのケースに当てはまると思われない。これをどのように考えたならばよいかということである。もちろん私のいう「異宗教交流の傾向」が、すべて当てはまる、などと思ひ上がつて言っている

のではない。ただこういう例・傾向が多いということは事実である。そのことから考えてみると、やはり韓国の場合は例外のようにみえる。それはなぜであろうか。このことを考えてみたいと思うわけである。

二 キリスト教盛況の因由についての諸説

韓国の宗教を考える人は、一様に誰でも、この驚異的なキリスト教の盛況さはなぜか、ということについて疑問をもつとみえて、それぞれの方が、それぞれの意見を提示している。それらはすべて尤もな意見であると思われるのであるが、残念ながら私にとっては、もうひとつ腑に落ちない点がある。それは端的に言う、キリスト教受容をめぐるの日韓両国の相違をどう説明するかという点である。それがはっきりしないと、異宗教の交流にみられる一つの方向の説明がつかなくなってしまうからである。そこで以下これに焦点を絞って考えてみようと思うのであるが、話を進める方法として、私の拝見した諸意見の中から、もっとも多くのことを示唆された柳東植氏の『韓国のキリスト教』（東京大学出版会・一九八七・一一刊）という著書に、代表となってもらって、その答えを聞きながら、それに疑問を提示するという方法で、論を展開していつてみたいと思う。

まず氏は、「これにはもちろん多くの複合的な要因が考えられるが、ここでは一応三点に絞って考察する」（一七五ページ）としている。事実、こうした精神社会のできごとは「多くの複合的な要因が考えられる」ので、これらを箇条書きにすること自体が無理なのであるが、一応理解をまとめるためにも、このような操作をされたことを、まず了解しておく必要がある。その上で氏の指摘を見ると、まず、

第一に「社会変動とかかわる教会外的な要因である」として、「クリスチャンの急増したのは、激しい社会変動のあつた時期と重なる」ことに注目し、次のような事例を示している。

イ、日本の植民地になった一九一〇年に七万人であった信者が、二〇年には二一万人になったと指摘し、当時の事情に対して、メソジストの梁柱^{ヤチユサム}三氏が「国内の情勢が沸騰し、政治問題で全国の人民が安定を失っているときに、教会の復興が起こり、神に依存すべく教会に集まってする人々が多かった」（『朝鮮南監理会三十年記念報』一九二六・ソウル）と述べていることを引用している。

ロ、また、解放と朝鮮戦争の時も、三〇万人から八四万人（一九五七）に増えた。

ハ、維新体制下の七〇年代には、とくに急速な増加を示し、七二年に三一九万人が、十年たらずでほぼ倍増したと指摘し、激しい社会変動に見舞われた当時は、「民衆はキリスト教を信仰し、教会共同体に所属することによって安定を求めたと理解される」と述べている。

第二に、教会内的な要因として、特有の宣教活動と信仰形態とを挙げている。

イ、急激な社会変動に対し、儒教は保守的な態度をとり、仏教は無関心であったのに対し、キリスト教は積極的な支援を与えてきた。

ロ、キリスト教の預言者的神観は、近代化に必要な批判精神をもたらし、プロテスタントの原理ともいわれる自由と平等と自律の思想は、民主主義的な共同体を基礎づけるものであった。

ハ、民衆の宗教的心性に訴える熱情的な祈禱会と聖書研究会、信徒を総動員した伝道活動からなる復興会^{ブレンフエ}が、教会の成長に寄与した。

ニ、プロテスタントは、教育・医療・文書事業を通して、文化の開化に貢献した。初期の民族運動家のほとんどがクリスチャンであった。

第三に、キリスト教をたやすく受容し、これを成長せしめた民族的靈性の問題があるとし、キリスト教の神觀念と朝鮮民族が持ち続けてきたハヌニム（天の神）との觀念には一致するものがあつたからであるという。

以上が、氏の挙げた三点の要約である。するどい指摘であると思う。たしかにこれらの要因が、今日の韓国のキリスト教界を形成してきたものと思われるので、これに異論を唱えようとは思わないが、今も述べたように、これだけでは前述の疑問が氷解したというわけにはいかないので、以下この三点を軸にして、疑問を追つてみたいと思う。

最初に、「社会變動とかかわる教会外的な要因」であるが、たしかに宗教には、自分を取り巻く、しかも、自分の力ではどうにもならないような社会變動に遭遇した場合、人々をそこに集めるだけの何らかの力をもっている。梁柱三氏ヤンチュサムが記していることはもつともである。

ただこの指摘の中で、「第一の口」に、「解放と朝鮮戦争の時も、三〇万人から八四万人（一九五七）に増えた」とあるが、これは必ずしも社会變動に伴う精神的要素ということだけでなく、朝鮮戦争の時に、一千万近い民衆が、北から南へ雪崩のように入りこんできた。その中には、共產治下での宗教弾圧、とくにキリスト教徒迫害の嵐を逃れて南に安住の地を求めて来た多くの人々がいたという、物理的な要素のあつたことも忘れてはなるまい。それはともかくして、ここで尋ねたいことは、韓国の場合、なぜそれがキリスト教でなければならなかったか、ということである。

たとえば、日本においても、第二次大戦以後の精神的不安定さは相当なものであつた。これ以上のことは、考

えられないような激しい社会変動であった。当時、二十歳代の初期という多感な青年時代を送った筆者などは、身をもってこのことを体験してきた。余計な話かも知れないが、およそ宗教とは無縁に育ってきた私が、戦争の時期を通して、生涯を宗教に関わって生きるようになったのもその一例であろう。この時、キリスト教も、その他新興宗教も、大童の活動をし、とくにキリスト教について言えば、先に述べたように「日本はキリスト教国になつてしまふのではないか」の思わせられるほどの活躍であった。しかし、それから四十年後というよりも、年を追うごとに、と言った方がよいかも知れないが、キリスト教界は、盛況とは言いがたい今日の状況に向かって進んでしまつた。はつきり言えば、奇妙なほどキリスト教は伸びなかつたということである。それがなぜ韓国ではキリスト教が盛んになつていったのか、ということ、またまた疑問は振り出しに戻つてしまふ。要するに「社会変動とかかわる教会外的な要因」だけでは、この疑問は解決しないということである。

次に、「教会内的な要因」として、特有の宣教活動と信仰形態」とを挙げているが、これとても、韓国のキリスト教が、日本のそれと、それほど変わつてゐるとは思われない。キリスト教が、「近代化に必要な批判精神をもたらし」、「自由と平等と自律の思想、民主主義的な共同体を基礎づけるもの」をもち、「教育・医療・文書事業を通して、文化の開化に貢献した」ことは、日本のキリスト教についても、言えることであつて、韓国キリスト教だけの特性とはいえない。そこで、これをもって韓国キリスト教の驚異的成長の理由とするわけにはいかない、ということになる。

そうなると、問題は、キリスト教の宣教を受け入れた日韓両国の宗教界、もしくは、広範囲に言つて、精神社会における相違にあるということにならうか。キリスト教そのものではなく、受け入れの土壌の方に問題があつ

たということである。この観点から氏の指摘を見ると、氏は第二のイで、次のように述べているが、それが重要な点になる。

イ、急激な社会変動に対し、儒教は保守的な態度をとり、仏教は無関心であったのに対し、キリスト教は積極的な支援を与えてきた。

ここに、「キリスト教は積極的な支援を与えてきた」という点は日本でも同じであったから、それはともかくして、それよりも「儒教は保守的な態度をとり、仏教は無関心であった」という指摘が大切である。

このことは、私の言う、異宗教交流の第四の傾向、すなわち、「高度な宗教間の接触においては、すでに一つの宗教が、民族の中に確立され、その宗教を中心とした文化統合が行われている所では、他の一方の宗教は容易に布教されることはない」ということと大きな関わりが出てくる。もし、この「傾向」をこのまま韓国に適用してみると、韓国には、今更ここに述べるまでもなく、千五百年を民族とともに生きてきた仏教と儒教とがある。これらが高度な宗教と思われることは言うまでもないことであるから、これらを中心とした文化統合が行われている所では、他の一方の宗教、すなわち、この場合キリスト教であるが、それは容易に布教されることはないはずなのである。それにもかかわらず、現実にはキリスト教が盛況をきわめているとなると、「儒教は保守的な態度をとり、仏教は無関心であった」ということが、この「傾向」をネグレクトすることになったと言わなくてはなるまい。それでは、韓国における仏教と儒教とはどのようなものであろうか、以下、そのことを考えてみたい。

三 韓国における仏教の現況をどうみるか。

韓国に仏教が伝来したのは、高句麗は四世紀末、新羅は六世紀初頭、百濟は四世紀末ということになっている。この仏教が、韓半島に伝来する以前は、韓半島の宗教は、東北アジアに共通するシャーマニズムであったと推定することは困難ではない。もし韓民族の三つ子の魂というものを考えるとすれば、このシャーマニズムの中における彼らの生活感情と行為であったということができよう。仏教はこうした彼らの三つ子の魂の渦巻く中に受容され変容されていったのである。

仏教は、統一新羅(六六八—九三五)時代に、元曉(六一八—八六)や、義湘(六二〇—七〇二)などという名僧を輩出し、あたかも統一新羅の国教とみえるほど隆盛を極めた。元曉は、知慧の完成によって大我を実現すれば、それがあらゆる価値の源泉「一心の源」となり、争いの死滅「和靜」が生まれると説くなどして、今日の韓国の指導理念ともなり得るような仏教思想を唱道した。しかし、これは当時においてさえ、一般には必ずしも正しく理解されず、新羅仏教の隆盛期に、すでに菩薩修行は見失われ、もっぱら庶民のシャーマニズムと結合し、祈祷、祭礼の神秘化、呪術化の傾向を辿っていた。

つづく高麗朝(九三六—一三九二)においても、史上に残るような禪の傑僧、教義学の名僧が多く現れ、仏教は、統一新羅時代に続き、名実ともに国教的地位を確保するまでになったが、内容は必ずしもこれに伴わず、シャーマニズムとの結合はますます強固となり、陰陽、図讖をとりいれたりしていた。これは仏教本来の立場から言えば、墮落と言わなくてはならないし、ついには排仏論の抬頭を招くに至ったのも当然であったであろう。

李朝(一三九二—一九一〇)になると、今までの形勢は逆転し、仏教は弾圧され、代って儒教が国教化されていった。そのため寺院は深山に隠れ、巷間に仏閣をみることはできなくなってしまった。仏教は一九〇二年になって、

漸く布教の自由が与えられ、度牒制度が復活したという有様であった。このような状況に陥ったのであるから、仏教界は、反省し、目覚めて、本来の姿を取り戻そうとでもすればよかったのであらうに、それもせずに、教団の維持もあつてのことではあらうが、いよいよシャーマニズム的民間信仰と結びつき、祈福的、現世利益的信仰に陥っていった。その延長線上にあるのが今日の仏教界であるといえる。このことは、今でも寺へ行けば、道教の七星閣（北斗七星）やシャーマニズム的三神閣、その他もろもろの現世利益的事物を見るに事欠かないし、本堂の大雄殿には、本尊の脇にシャーマニズム的信仰の山神が祀られていることなどによって、一目で明らかである。寺のやつていることは、たとえばオリンピックといえど大々的に祈祷法会をしたり、受験シーズンともなれば、寺に集ってくる母親たちに合格祈願をするというようなことで、残念ながら、そこに高度な宗教性など見いだし得ないのである。

このような状態は、何も韓国だけに限ったことではない。日本の神社仏閣でも同じことをやっている。宗教には常にこういうものがつきまとうものなのであらう。しかし、問題は、それがすべてか否かということである。もしこれがすべてであるというならば、何をもって高度な宗教などということができようか。たとえ世俗的にそのようなものがあつたとしても、真実な信仰がその奥にあるからこそ、宗教の生命があるのであらう。真実な信仰とその周辺の信仰と、換言すれば、真実なるものに向かおうとする求心力と、それから離れようとする拡散力とも言えようか、その両者は峻別されなければならない。それにもかかわらず、両者を混同して、というよりも、拡散された周辺の、現象的宗教だけをとらえて、それを宗教そのもの、宗教のすべてと考えるもうと困る。しかし、世の中には、そう思っている人がいかに多いかということである。

某日、私はソウルのある大学教授にお目にかかり、韓国のキリスト教についてお話を伺ったことがある。氏はこう言われた。「日本では、西田幾多郎、田辺元、和辻哲郎などという世界的思想家が、深い仏教的思索の上にたつて、自分の信仰思想を築きあげている。日本人は、キリスト教と比較して仏教の深さを十分に知っている。しかし、韓国人は違う。仏教にそれだけの評価を与えていない。とくに知識層ほどそうである」と。この評言をもって韓国の仏教を客観化するつもりはないが、しかし、この評言は、ほぼ世評と言ってよいのではなからうか。とすればこの評言は重要である。なぜならば、こうした世評によって人々は動かされているからである。シャーマニズムと結合した仏教に、国の信仰思想の将来を託せるとは、韓国人々は思っていないのである。

しかし、日本ではそうではない。たしかに仏教界は、葬式仏教、現世利益仏教などと悪口を言われている。しかし、それは世俗の教団のことであって、一方で、人々は、このほかに真実の仏教なるものがあること、そして、それは深い信仰思想によって貫かれていることを知っている。しかも、それに参究するものに、真の宗教的深さを見るような尊敬の思いを抱いている。これは必ずしも我田引水とは言えないであろう。なぜかと言えば、ソウルの学者が言おうとしていたのは、このことであつたのであるから。

法然の『選択本願念仏集』『和語燈録』、親鸞の『教行信証』『歎異抄』、道元の『正法眼蔵』等々は、世界の宗教思想の中においても、もっとも深いものの一つであり、世界の宗教をリードするだけの力をもっている。しかも、それらは現に今、人々の心の中に生きて、力となっているのである。心ある日本人は、仏教をそのように捉え、敬意を払っている。これが日韓の大きな相違ではなからうか。はっきり言って、韓国の人々、とくに知識人といわれるような人々は、韓国の仏教をこのように捉ええてはいないのであろう。仏教を、仏教の顔をもったチャー

マニズムの一つとして捉らえているのではなからうか。そうであるならば、韓国の仏教は必ずしも高度な宗教とはいえないのである。

韓国の仏教をこのようにさせたものは、韓民族の三つ子の魂としのシャーマニズム的感覚であつたといえよう。余談ではあるが、韓国にも「三つ子の魂百まで」とそっくりの諺があるという。逐語訳すると、「三歳の癖が八十まで」というのだそうである。ほとんど世界中の言語に、この諺があることはおもしろいことである。韓民族は、「三歳の癖」であるシャーマニズムという宗教現象の中に、仏教を埋没させてしまったのではないだろうか。

もし韓国の宗教の将来について、口幅つたいことを言うことを許されるならば、「三歳の癖」は、「八十まで」残るわけであるから、その癖を純化して、他者に対応していくべきではないかということである。「純化」とは、たとえば、シャーマニズムという現象を、現象として続けるのではなく、その背後にあつて、それを形づくっている精神を把握し、それを相続させることである。例えば、シャーマニズムの背後に、人智を越えた大いなるものを想定しているであらう。（それを何と呼んでもよいが）それを固定化しないで（固定化すると形、現象になつてしまう）、内的に表現し、流動的に把握していくことである。例えば、日本人は、この大いなるものを「尋常ならずすぐれたる徳（こと）のありて、可畏（かしこ）もの」（本居宣長『古事記伝』卷三）と受け取り、固定した現象とはしてこなかった。そしてこの流動的な神観念を基本として、その後受容された仏教をも、日本的に変容してきたものと思つている。（前掲・拙著『日本人の信仰』中公新書）。

こういうと、前掲の柳氏の『韓国のキリスト教』は、あたかもこの指摘に応えるように「風流道」なるものを取り上げ、それが「朝鮮の文化史全体を基礎づけてきた民族的靈性」であり、「各種の宗教を受容し、これを展開させ

る文化の場であり、原理となるものである」と言っている。私のいう民族の三つ子の魂の内的把握が「風流道」であるということである。そして氏は、その「風流道」なるものの構成要素は、一つには「ハン」（一・大・天）、二つには「モツ」（興・自由・調和）、三つには「サム」（人間）の意を含むものであるとし、「人間とは実に『ハン・モツ（チン）・サム』（超然とした粹^{いさ}な生）を営むべき存在として理解される」と述べている（「序章」これは氏が力説しているところであるが、このように要約すると、真意を誤り伝える恐れがあるが、今それを詳説する余裕もないし、場所でもないので、直接書物によって確かめて戴ければ幸いである。）

このように、それぞれの民族の宗教的展開を民族的靈性の展開とみて、それを探していこうとする思惟方法は、小著も同様なので、何の異論もないが、ただ韓国の民族的靈性を「風流道」ときめていくプロセスにも、その構成要素の捉らえ方にも、何か氏の觀念が先だちすぎ、話が飛躍的に進んでいっているように思えて、もう一つ同調できないものがある。この辺に他国人の限界があると言われれば、それまでであるが。

そして氏は次に、その「風流道と宗教文化の展開」（一三ページ）を述べるのであるが、それについても、氏の哲学が前面に出過ぎていて、必ずしもわれわれ読者を納得させきるものではない。もう少し客観化されたものがあって欲しかったと思う。

たとえば、氏は「文化史は民族的ビジョンの実現過程である」として、「古代（新羅）と中世（高麗）を支配した朝鮮仏教（中略）」は仏教のハンの展開「初期から弥勒信仰を中心とした護国祈祷仏教が発達していたが、これは仏教のサムの展開」「こうしたハンとサムの円融によって形成されたのがモツの展開としての芸術的仏教」と説くのであるが、「芸術的仏教」といわれることには納得するものはあるが、全体としては韓国の仏教は、民族的

霊性の外形的側面であるシャーマニズム化の展開であつたと言わざるを得ないようにみえ、求心力としての氏の言われる「ハン・モツ（チン）・サム」（超然とした粹^{じゆん}な生）の実現過程であつたとは考えられないのである。

私がこのように思うには、もし、民族的霊性の求心力の側面、氏の言われる「ハン・モツ（チン）・サム」の側面が、韓国の仏教史上に実現されていたとしたならば、日本の鎌倉時代のような宗教改革の時があつたのではなからうかと思うからである。仮に高麗時代にでも、仏教の内部から改革ののろしがあがつていれば、シャーマニズム的現象にだけ走ることは防げたし、それこそ「ハン・モツ（チン）・サム」が、仏教の上に実現されていたのではないかと思うのである。これが日韓両国の仏教の内容を分ける最大のポイントであり、同時に、この小論のテーマであるキリスト教盛況の大きな理由になっていると思う。要するに、氏の言われるとおり「急激な社会変動に対し、仏教は無関心であつた」のである。というよりも、実際は、関心をもつたとしても、なす術を知らなかつた、すなわに、無力であつたということであらう。

四 儒教をどのようにみるか。

次ぎに儒教についてであるが、まず第一に、儒教を考える前提として理解しておくべきことは、儒教は元來が社会倫理（礼学）、もしくは政治哲学（治世学）ともいうべきものであつて、純然たる宗教とは考えにくいという点である。これはこの小論のテーマを考える上で、非常に重要である。たしかに韓国の儒教は、李朝が、国教化しただけあつて、世界の儒教圏内にあつても、もっとも宗教的色彩を帯びたものといえる。民衆の冠婚葬祭が儒教的に執り行なわれていることによつてもこのことが分かる。しかし、いかにこれを宗教的に扱つてみても、本質的に宗教と言ひ得ないところに、儒教の特質がある。それが宗教という枠組の中でいえば、儒教のもつ一種の限

界である。もし儒教が宗教的要素を十分に備えていたとすれば、簡単に言つて、中国に道教は生まれてこなかったといえる。私はかつて「人間は道具をつくる動物である」ということばを置き換えて、「人間は宗教をもつ動物である」と言ったことがあるが、あの旧石器時代のクロマニヨン人でさえ、僅かな遺物の中に、宗教的なものを発見することができるといわれているように、人間社会は宗教的なものを無視しては成り立たない。中国に道教が生まれたのは、儒教では彼らの宗教的欲求を満たすことができなかったからであるといえよう。

このことを韓国に当てはめて考えてみると、李朝五百年は、儒教を国教とし、仏教を弾圧してきたのであるから、この五百年間、韓国の人々は、本当の宗教らしい宗教を与えられてこなかったということになる。しかし、人間の宗教的欲求は、そのようなことで治まるものではないということになると、それをどこかに求める。その現れの一つが、「三つ子の魂」としてのシャーマニズムであることは当然であろう。そして、それはまた、シャーマニズム化した仏教となつて現れ、三つには、宗教化された儒教に、僅かでもその渴きを求めていったといえよう。しかし、本来の宗教からいえば、いずれも代用品のようなものばかりであつてみれば、心ある人々の宗教心を満足させることはできないのであるから、なんとしてもそれをどこかに求めようとするのは必然であつた。キリスト教がその欲求にあてはまるものであつたことはたしかである。これがキリスト教盛況の一つの理由であるといえよう。

次に、それにもかかわらず、儒教は、李朝五百年の間、国教的地位を占めてきたのであるから、韓国独立以後のキリスト教の進出に対して、儒教側から言えば、何らかの宗教的抵抗、もしくは防波堤的役割を果たしてしかるべきではなかったか、ということはいえる。たしかにそれはあつた。たとえば、祖先祭祀をめぐるの両者

の葛藤がそれである。祖先祭祀は儒教がもつとも尊ぶ儀礼である。これをキリスト教側は拒否してきた。キリスト教では、祖霊に対する追孝として行う祭祀は、飲食物を供えるようなことをするのではなく、道徳的生活をもつてなすべきであると説いて、儒教的祭祀を否定した。儒教側は、これを祭祀そのものの否定とみて、弾圧してきた。韓国キリスト教殉教史の第一ページとなった事件もこれにはかならなかった。一七九一年、天主教徒であった尹持忠ユンチジュンと権尚然グワンサンランとが、祖霊を象徴する位牌を焼き捨てたため、捕らえられ処刑されたという事件である。この他、忠君の問題、絶対者の理解、身分階層の否定等々は、韓国にキリスト教が受容されて以来、戦後の民族解放まで、常に争われてきたことであった。しかし、儒教を擁護する国家の力がなくなった今日では、特別の儒教擁護者を除けば、何の問題もなくなっている。キリスト教側もまた、祖先祭祀に目くじらをたてることなく、おらかにこれを認める方向に向かっている。要するに、戦後の民族解放以後の、韓国内における儒教的慣行は、キリスト教の盛況の歯止め役にはならなかったのである。

第三に、韓国の人々は、一般に儒教をどのような捉らえているか、一般という意味は、宗教としてということだけではなく、広く文化としての儒教を全体としてどう評価しているかということである。もしこうした評価が高ければ、そうむやみにキリスト教の盛況を許すものではないからである。しかし、こうした一般的评价というものは、なかなか他国民では、それを肌で感ずるということがないので、分かりにくいのであるが、ちょうどこの小論を認めている頃、『文芸春秋』八月号に、盧泰愚大統領と司馬遼太郎氏との「我々はこんなに異なり、こんなに近づいた——二つの国のかたち、歴史・政治・文化を語る——」というテーマの特別対談が掲載された。その中で、盧泰愚大統領が、まさにこの疑問に答えるような発言をされておられるので、少々長くなるが、それを引用させ

てもらいたい。

ご存じのように、我が国は、李朝五百年という、世界でも珍しいひとつの王朝が長く続きました。そのことには長所もあれば短所もあります。

ひとつの欠点は、中国から受容した儒教思想です。それも朱子学を建国の理念としました。しかし、朝鮮の儒教は中央集権制と科挙制度によって教条化し、弾力性を失いました。もちろんこの儒教思想、ソンビ（士）の思想が、多くの国民の生活の模範になり、民衆をリードしていったというプラスの面もあります。しかし、それ以上に『黒白論理』、物の見方を黒と白に分けて妥協することを知らないという態度、それが今日まで尾を引いていると言えるでしょう。そのために歴史的に、さまざまな悲劇もおこりました。また外国からの文物をまったく受け入れようとしない鎖国状態が五百年の間続きました。

これが日本ではちよつと違いますね。日本も江戸時代は同じ儒教の国でありましたが、日本の儒教には、朱子学だけでなく、陽明学もあれば、荻生徂徠のような人物もいました。我が国では、そのようなことはまったく許されませんでした。異説を唱えた者は、すぐに処罰されたのです。日本では、いずれも学説として認められ、発展することができました。黒白論理ではなく、お互いに異なった考え方を許して進んでいくことができた。それが多様化に進み、国家を発展させることができたのではありませんか。

もうひとつ、韓国では李朝五百年の間、強力な中央集権が続き、すべて中央に集中していました。ところが日本は、封建制度があり、地方に様々な政治、経済、文化の中心があつて、バラエティに富んだ近代化を進める大きな力になったのではないかと思います。

先のソウルの学者の発言と同様に、これをもって韓国の儒教を学術的に客観化しようというのではないが、先にも述べたように、一般はこうした評価によって行動するので、こうした評価は重要である。

司馬遼太郎氏も、この対談の「前書き」の中で、この朱子学について、狩野直喜氏（中国学者・一八六八—一九四七）の説によりながら、次ぎのように述べている。

朱子学をやった人は、はげしく他人を責めるそうである。朱子学が正義体系であり、ドグマであることはいうまでもないが、そのドグマに適合した「正義」にあわなければ、これを邪としてはげしく責める。近代以前の朝鮮では、士大夫たちは、「衛正斥邪」（正学を衛り、邪学を斥る）ということばをさかんにつかっていたがいに攻撃しい、党を組み、党争をかさね、李朝の政治史はそのことにあけられた。

朱子学は要するに思弁哲学である。形而上性がたかく、人によっては虚学などとよんだりもする。

李朝の官学は、朱子学であった。体制の維持には都合がよく、李朝が五一八年つづいたことの主因をそこにもとめる人もあり、同時に、絶望的なほどの「停滞」もそのあたりにあるというひともある。（中略）

李朝においては、清朝の考証学派的な「実事求是」や西洋的な科学技術思想をもつことは、命がけだったのである。

以上の叙述から、次のようなことが考えられる。

儒教、とくに朱子学というものの性格が、以上のようなものであるならば、それは、外国との門戸を開き、西洋的な科学技術思想を受け入れようとする、韓国全体の時代の趨勢に反するものということになる。「外国からの文物をまったく受け入れよう」としない鎖国状態が五百年間続いた」という事実、あるいは「絶望的なほ

どの「停滞」に、少なくとも儒教が影響していたとなると、民衆は、これを墨守しようとする愚はしないであろう。そして、それはその対極として西学（西洋の文物）とその宗教的理念としての西教（天主教）の受容を促進こそすれ、これを拒否することにはならない。それが時代の要請であったのである。そして、十九世紀末からプロテスタントの受容がこれに拍車をかけたのである。これに対しても、儒教が根本的に対抗するものを持ちあわせていなかったのである。

五 韓国キリスト教の特質

そこで最後に、キリスト教の受容そのものについて考えてみたい。柳氏は先に指摘したように

第三に、キリスト教をたやすく受容し、これを成長せしめた民族的靈性の問題である。（一七八ページ）

として、キリスト教の受容に民族的靈性が深く関わっていると指摘している。これは異宗教交流の観点からいえば、「第二の傾向」すなわち、「民族の三つ子の魂、百までも」と要約されるものとの関連である。この小論にとつては大事な点なので、これに続く全文を引用しておきたい。

キリスト教は祖先祭や村祭を中心とした伝統文化を一応排斥したように見られるけれども、しかしその深みにおいて、プロテスタントは伝統文化の粹に根を下ろしていた。端的なものが神観念である。「ハヌム」は古来、朝鮮民族が持ち続けてきた天の神であった。無神論的な仏教と朱子学が支配的な時代にあつては表面的には抑圧されて、土俗信仰のなかに生きるか、仏教や儒教を土着化させる形をとっていたハヌムを、神中心的なキリスト教は表にもちだしたのである。キリスト教の神こそハヌムであると宣べ伝え、いわば民族の宗教心の深みにキリスト教を植えつけたのであった。

これはまた単に宗教心や神の表現の問題にとどまらず、キリスト教の信念体系には、朝鮮民族の靈性に合致するような内容があったのである。序章で述べたように、ハヌニム信仰を核とした民族的靈性が風流道であり、朝鮮の文化史は神人融合を基礎にした「ハン・モッチン・サム」（大いなる美しき生）の追及の歴史であると理解される。ところがキリスト教は、われわれに内在する神、すなわち、聖靈によて靈的な救いがえられると同時に、この世における祝福がえられるものと信じる。これは超越的なハンと内在的なサムの結合として理解され、こうした超越性に位置づけられた現実的生こそ「モツ」の生、すなわち、民族的ビジョンの実現として受け入れられるものだったのである。

今も述べたように、氏は、この小論的表現でいえば、韓国でキリスト教が盛況を極めているのは、韓国人の「三つ子の魂」によってであるというのである。これはむしろ私の言いたいことであるから、この点は全く同意見である。

しかし、この状況を、信仰という立場から、肯定的にみようとするか、否定的にみようとするかという点では、両者は全く反対の立場にたっているようである。氏は、「キリスト教の神こそハヌニムである」と言い、「いわば民族の宗教心の深みにキリスト教を植えつけたのであった」と言われるのであるから、キリスト教の盛況さは、まさしく韓民族の伝統としてのシャーマニズムの顕現であり、それは歓迎すべきであるということになる。私は、キリスト教の盛況さは、シャーマニズムと結合しているとみる点では同じであるが、それは、キリスト教を正しく伝えることにはならない、キリスト教と離れつつある、はつきり言えば、キリスト教ではなくなりつつあるとみたいのである。こう言えば必ず、それでは本来のキリスト教とは何か、と問われるであろうが、それはそ

れで大問題であつて、今その問題に関わる余裕はないので、常識的に西欧のキリスト教と比較して、という程度に考えておいていただきたい。

氏は「ハヌニムは古来、朝鮮民族が持ち続けてきた天の神であつた」という。そのとおりであろう。そしてハヌニムは、「無神論的な仏教と朱子学が支配的な時代にあつては表面的には抑圧されて、土俗信仰のなかに生きるか、仏教や儒教を土着化させる形をとっていた」その「ハヌニムを、神中心的なキリスト教は表にもちだしたのである。」という。たしかにハヌニムは、仏教や朱子学が支配的な時代にあつては表面的には抑圧されたであろう。しかし、「三つ子の魂」としてのハヌニムは、それで小さくなっているような弱いものではないはずである。それは「土俗信仰のなかに生き」、むしろ積極的に仏教をも儒教をも、内に受け入れて消化してしまつた。氏の言う「仏教や儒教を土着化させる形」である。それが上來述べてきた仏教のシャーマニズム化である。そういう強さをもっているものが、ハヌニムの神観念をもつた韓国のシャーマニズムなのである。

そのハヌニムを「神中心的なキリスト教は表にもちだしたのである」というのであるが、そうすると、ハヌニムは、キリスト教が受容されて初めて所を得たというように聞こえるが、それならばキリスト教によつて「表にもちだされたハヌニム」と、「土俗信仰のなかに生き、仏教や儒教を土着化させる形をとつてきたハヌニム」（それは裏のハヌニムとでもいうのであろか）、それと、どのように違ふのであろか。氏は、「表にもちだされたハヌニム」は、「キリスト教の神」そのものであり、「キリスト教の信念体系には、朝鮮民族の靈性に合致するような内容があつたのである」と言われるが、それでは「土俗信仰のなかに生き」てきたハヌニムは「朝鮮民族の靈性」の顕現ではなかつたのであろか。それこそがハヌニムそのものではないか。私には、ハヌニムの表と裏といわれ

ても分らない。キリスト教のシャーマニズムとの結合が表であり、仏教のそれは裏であるとは言えないであろう。シャーマニズム化に、表も裏もないのではないだろうか。

そこで私はこう思う。韓国のキリスト教は、かつての仏教が辿ってきた道のように、知らぬ間に、シャーマニズムのとりこになってしまっているのではないかと。それゆえに、決してこの盛況さを喜んでおられないのではないかと。こうした徴候はすでに指摘しきれないほどである。それは韓国のキリスト教徒自身が、十分に承知していることであり、私自身も、心配の声を聞いているほどである。

たとえば、「プフンフエ」（復興会）運動といわれる一種の伝道集会、熱烈なリバイバル・ミーティングなるものも、その中の一つではないか。韓国キリスト教の百年は、この運動を通して成長してきた教会史であるといわれるくらい、この運動のもつ比重は大きい。これに対する評価は分かれるが、これは韓国キリスト教の特性ともいえるかもしれない。これをどのように考えたならばよいであろうか。この集会は、見れば分かるように、明らかに民衆の心の底に流れているシャーマニスティックな潜在意識（三つ子の魂）に宗教的感情を運動させたものといえる。西欧のキリスト教を見たものの目には、それは異様にさえ見える。まだ年数を経っていないだけあって、仏教のシャーマニズム化と同じであるとは言えないが、韓国の「民族の三つ子の魂」としてのシャーマニズム化であることは明らかである。

しかし、キリスト教側は、たしかにそれは、シャーマニズム化ではあるが、それを越えさせているものがある。それは聖書研究であるという。当事者は、そう思いたいであろうが、実際にそううまくいっているのであろうか。そう言われるたびに、私は、韓国人のもつ強烈な性向を思わざるを得ない。その強烈さがあればこそ、彼らの「三

つ子の魂」は、他民族のそれをはるかに凌ぐ強固なものがあつたのであろうであらう。仏教のシャーマニズム化もそのためであらう。このように考えれば、いかに聖書研究をして、それを超えさせているとはいへ、シャーマニズム化がいつそれを上回るか、保証の限りではない。シャーマニズム化の中に、キリスト教が埋没されてしまふということである。すでにそれを憂えている声が、私の耳にまで達しているということは、それが現実化しつつあることであらう。真実の信仰というものは、稀有の存在である。それは時空を超えた事実であらう。しかし、信仰をそこまで厳しく要求しないとしても、何千、何万、何十万という人々が、熱狂的信仰に恍惚となる風景をもつて、そこに真実のキリスト教信仰が生きているとは言い難いのである。

韓国キリスト教についても一つ言いたいことは、その世俗社会との関係である。先に述べたように、外国との門戸を開き、西洋的な科学技術思想を受け入れようとする、韓国全体の趨勢は西学（西洋の文物）とその宗教的理念としての西教（天主教・十九世紀末からのプロテスタント）とを、一種の尊敬と歓迎の念をもつて受け入れてきた。キリスト教につながることは、悪い言い方になるが、先進者のステータス・シンボルであり、ファッションでもあつた。仏教者といつたのでは、なんとも泥臭く、人々の尊敬はうけられないのである。政界立候補者の宗教の欄を見れば、このことは一目瞭然である。キリスト教信徒の何と多いことか。先のソウルの学者の言葉を借りれば、「教会の役員・長老の名刺の社会的信用度はたいしたものですよ。とすれば、信仰は二の次でも、教会への奉仕はいたしますよ」ということなのである。このように考れば、キリスト教の盛況さは、必ずしも信仰によるのではなく、それを取り巻く周辺の要素に関わっていることが多いことである。いずこの世界でも同じことではあるが、

宗教を考える場合は、常にその本来的なるものと、それが社会的に現象として現れたものとを峻別してかからないと、大変な間違いを起こす。宗教が教団を形作り始めた途端に、それは政治、経済と同様に、社会的事象として考えなくてはならない。極端に言えば、宗教を営業品目とした株式会社なのである。そこには市場原理が働き、離合集散ただならぬものがある。決して純粹な信仰だけで行動しているのではない。これは何も韓国のことを言っているのではない。古今東西いずれも同じである。

ご他聞に洩れず、韓国キリスト教界もそうである。教会は世俗的要素に呼応し、プロテスタントの教団の派閥の多いことに一驚させられる。最大教派である長老教は四十五に分かれ、メソジストは四、バプテストも四、五旬節教は八、その他合わせて七十四教団を数える。カトリックが一教団であることとまことに対称的である（末尾表参照）。

天主教についてあまり言及してこなかったのは、改新教に比べ、以上のような指摘を受けることが少ないからである。一九八〇年代は、「韓国天主教二百周年」代として、「刷新と土着化」をスローガンとして精神運動、記念事業等を行っている。信徒数は二百三十万という。これは最大に数えてのことであると思う。「韓国宗教便覧」によれば、一九八三年末の統計で一百五十九万である。

いずこの宗教界も同じであるが、信徒数が多ければ多いほどよいと思って、むやみに増やそうとするが、そのような必要は何もない。救いは質であって、量によつては求められない。各教団が、数十万人を動員する大型集会を競って開催し、力を誇示しようとしているのは愚かしいことである。宗教は企業化し、信者の数と財産によつて、公然と売買され、儲かる企業とさえみなされているという。四千万の人口のうち、またたく間に一千万の信

者ができたなどということが、そもそもおかしい。これではまったくファッションショウのようにみえる。信仰とはそのようなものではないはずである。

六 むすび

異宗教の交流という観点から、韓国のキリスト教の受容をめぐる諸問題を考えてみたのであるが、非常にショッキングな結末に到達した。すなわち、「高度な宗教が民衆の中に確立され、その宗教を中心とした文化統合が行われている所では、他の高度な宗教が入ってきても容易に布教されることはない」という一般的傾向に対し、韓国のそれは例外のようにみえていたのであるが、実はそれは例外でなく、一般には高度な宗教と考えられていた仏教が、韓国においては、必ずしも高度な宗教として通用していなかったということである。その原因は、同じ異宗教の交流にみられる「民族の三つ子の魂、百までも」と要約される一般的傾向、韓国でいえば、根強いシャーマニズム現象の中に埋没されてしまっていた。その結果、異宗教の交流の観点からいえば、むしろ、「第一の傾向」すなわち、「程度の低い宗教状態の中に、高度な宗教が入りこんでくると、たちまちそれが広まってしまふ」という傾向になってしまったということである。こういう発言は現在の韓国の仏教界からすれば、許しがたい暴言ということになるろう。しかし、個々の小事実に、真実の仏教信仰の生きていることは想像されても、全体的にみて、この事実はいくつがえらないのではなからうか。民衆はどのように仏教を把握しているであろうということである。

それに加えて、儒教は、前述のとおり、本質的に宗教と考えられないものがあるわけであるから、心ある民衆にとつては、真に宗教とよべるようなものの空白時代が長かったということになる。これらのことが双方相俟つ

て、容易にキリスト教の活動を許すことになったと考えられる。

キリスト教は、たしかに高度な宗教として、かつまた、近代化という国家と民衆の憧憬するものの精神的根源として、韓国国民に圧倒的な歓迎を受けた。しかし、歓迎を受けて怒濤のように入ってきたキリスト教が果たしてキリスト教本来の姿のまま、いつまでも韓国人に受け入れられていくかということになると、すこぶる疑問である。かつて仏教がそうであったように、韓国民の強烈な性向は、すでにキリスト教をも、彼らの「三つ子の魂」の中で変容してしまっている。少くとも変容しつつあるということはいえる。キリスト教が盛況を示しているように見えるのは、実は彼らの「三つ子の魂」であるシャーマニズムが、キリスト教という仮面をかぶって盛況を示しているに過ぎない、といえる部分が相当あるのではなからうか。そして、時間の経過とともに、その部分が拡大されることは必至であろう。

繰り返す言うが、真実の信仰とは稀有の存在である。宗教学という諦住態の型であろうが、それを現実社会の中に求めることは容易ではない。現実社会は、そうした信仰を取り巻く周辺の信仰と、その世俗化した宗教的行事とによって保たれている。しかも、それはまた徐々に変貌する。それを変貌させるものは、民族の「三つ子の魂」に他ならない。韓国の場合、その「三つ子の魂」が実に強烈なのである。

キリスト教の盛況になった理由を考えてみようと思つて始めた作業であつたのであるが、調べているうちに、韓国の「三つ子の魂」の強力なことに圧倒される思いがした。それが偽りのない感想であつた。韓国の宗教は、この「三つ子の魂」を、その延長線上において、純化していくところに、輝かしい未来があるように思われた。

この小論は、アジア研究所の海外研究助成費によつた。なお、韓国においては、昌原専門大学学長 裴徳煥先生（前

1. 韓国宗教別教勢現況（1989年版・『キリスト教年鑑』）

1987年現在（第一表）

区 分 宗 教 別	教 団	教 会	数職者	信 徒 数
改新教（プロテスタント）	74	30,321	48,334	10,337,075
天主教（カトリック）	1	2,367	6,604	2,312,328
仏 教	18	8,101	22,109	14,813,675
儒 教	1	231	17,477	10,184,976
天 道 教	1	290	4,902	1,079,901
円 仏 教	1	384	9,069	1,098,537
大 倣 教	1	80	255	507,533
其 の 他	10	1,389	13,280	3,127,251
計	107	43,163	122,032	43,420,774

亜細亜大学客員教授）に一方ならぬご協力を得た。この意味では、本来先生との共同研究とも言うべきものであるが、最終見解はすべて私見に基づいたものであるから、単独論文として、責任の所在を明らかにした。そのほか韓国関係の多くの方々にご指示を得た。ここに記し、厚く謝意を表したい。

教団創設年度別教団数 改新教（プロテスタント）

教 派	新団数	1910年以前に創設されたもの （でかこむ）	朝鮮總督府時代に創設されたもの（アンダーライン）	民衆解放後の分派・分裂によって創設されたもの
長 老 教	45	4		41
監理教（メソジスト）	4		1	3
聖潔教（Holiness Church）	2		1	1
浸礼教（バプチスト）	4		1	3
（神の教会）五旬節教	8		1	7
救 世 軍	1	1		
キ リ ス ト の 教 会	3	（不明）	（不明）	（不明）
福 音 教 会	1		1	
聖公会（アングリカン）	1		1	

其他：イエス教会（1933年）、ルッター教（1959年）、ナザレ教（1954年）、中華キリスト教（1965年）がそれぞれ一つずつ

韓国におけるキリスト教受容をめぐって

2. 宗教別教勢総括表（『韓国宗教便覧』） 1983. 12. 31現在

区 分	教団数	教堂数	教職者数	信 徒 数	宗教人口対 信徒比(%)	総人口対 信徒比(%)
仏 教	18	5,680	12,693	7,507,059	48.16	18.92
改 新 教	69	26,044	40,717	5,337,308	34.24	13.45
天 主 教	—	2,360	5,198	1,590,625	10.2	4.00
儒 教	1	231	12,013	786,955	5.04	1.98
円 仏 教	1	417	4,480	96,333	0.61	0.24
天 道 教	1	272	4,421	52,530	0.33	0.13
大 倣 教	1	65	101	216,809	1.38	0.54
其 の 他	8	1,583	9,016			
計	99	36,652	88,639	15,587,619	100	$\frac{39.29}{100}$

※ 全国人口数：39,669,859
(83.10.1現在)

※ 信徒数は、83.10.1現在・市道常住人口調査時に集計された宗教人口を基準とする。
※ その他統計は各宗教団体から提出された資料である。

3. 天主教教区別教勢現況（『韓国宗教便覧』） 83.12.31現在

教 区 名	教 堂 数		教 職 者 数						小 計
			神 父		修 士		修 女		
	本 堂	公 所	韓 国 人	外 国 人	韓 国 人	外 国 人	韓 国 人	外 国 人	
ソウル大教区	120	18	250	91	79	21	962	40	1,443
大邱大教区	73	134	145	18	78	6	579	14	840
光州大教区	55	117	51	23	16	7	158	20	275
全 州 教 区	40	196	89	2	0	0	43	1	135
春 川 〃	32	98	29	8	2	2	33	15	89
大 田 〃	53	264	94	7	11	0	207	0	319
釜 山 〃	57	39	92	14	19	0	551	16	692
清 州 〃	26	98	29	6	0	1	73	8	117
仁 川 〃	43	62	50	18	15	0	250	7	340
水 原 〃	55	362	97	7	26	0	332	7	469
原 州 〃	27	85	36	0	0	0	51	1	88
馬 山 〃	43	101	60	6	9	4	141	10	230
安 東 〃	23	116	24	8	4	4	57	6	103
濟 州 〃	12	11	11	5	2	0	35	5	58
計	659	1,701	1,057	213	261	45	3,472	150	5,198